

第二章 家系及び一族

一、博士の家系

博士の祖
先は藤原
氏に出づ

田邊氏の家系を按ずれば、博士の祖先は藤原實方卿に出づ。⁽¹⁾ 卿は家時の子、叔父濟時の養ふところとなり、長じて一條帝に仕へて左近衛中將に任せられ、歌道に於いて最も世に聞ゆ。所謂平安朝文化の盛期に參して、其の才藻を伸べたる時代の寵兒であつて、風詠は拾遺集以下の勅撰集に依り、今に傳へられて居る。然も斯道に對する卿の識見は、端なくも累をなし、一日、和歌に關して時の權勢家たる行成と爭ひ、陸奥守に貶せられてより、晩年また振はず、長徳四年十二月を以つて任所に卒去した。

徳川時代の末葉に到り、田邊姓天下に知らる

斯くて、北阪避遠の地に遺されたる其の子孫は、後如何にして卿の血統を傳へたであらうか。數代を経て、田邊堪僧の名により、田邊氏の姓、始めて家系に現はる。次いで徳川氏治世の末葉に到り、田邊貞齊翁の名は、夙に時人の知るところなり、其の養孫石菴先生は當代の名流を以つて人口に膾炙せらる。而して、石菴先生は博士

の祖父に、當れるものに外ならない。

語に曰はずや。將門將を出し、相門相を出す。果然博士が偉大なる材幹は、既に其の萌芽を父祖に發し、先人の努力善く之に培ひ、環境四圍の事情、また自ら膏沃なる土壤となつて、其の成長を助長せしめしところ、尠くはなかつたのである。

⑩十訓抄に博士の遠祖實方卿の逸事を録していふ、「一條院御位の時、實方中將、臨時の祭の試樂しがくに遅く参りて、かざしの花をたまはらで、追つて舞人ぶじんに加はるゝて、竹の臺うゑに進みよりにて、吳竹の枝を折りてさしたりける、めでたきよし人々ほめあひけり。これより後、試樂には竹の枝をさすさかや」と卿の風流の一世に冠たる思ふべし。なほ徒然草、童蒙抄等に卿の逸事散見す。

一、博士の父祖

貞齊翁まこと石菴先生いさ博士の曾祖父たる田邊貞齊翁は、江戸の人雜學者なり。名は經忠、字は世篤、次郎太夫と稱す。安永二年三月十一日歿。淺草本願寺に葬る。と江戸名家墓所一覽に載せられ、祖父石菴先生はまた左の如く傳へられて居る。

田邊石菴は儒者なり。名は誨輔、字は季德、號は石菴、通稱は新次郎中略、後ち昌平黌教授出役ミ。

なり、甲府徽典館學頭となる。自抄の史多し、當時唐本の舶來極めて少なく、殊に清人の著述は少中の少なり。石菴謂らく隣國現今の形勢を知るは急務なり。清の地志及び清人の文諸集其他雜書に就き一切撮取し以て八百餘人の清朝名臣名士の傳を撰す、世に傳ふるころの清名家小傳是なり。又文を學ぶもの或は近世の文を讀む能はざるを憐み、其正しきものを選び清の朱竹蛇より溯つて明の歸震川、唐荊州、王陽明、方正學、宋潛溪の文粹を編せり。著すころ續左傳合案、史漢合解、國策論文、清名家外傳、續八大家文、續本等あり、又畫を弄ぶ、安政三年十月十二日歿す、年七十六、二子あり、長男孫次郎、號勿堂、西洋流火技を以て世に顯はる、早く歿す。子あり、朔郎、云ふ、次男太一、號蓮舟、石菴の墓は淺草本願寺本堂の裏にあり。

——第八版大日本人名辭書一三五〇頁參照

石菴先生
の交友

先生の遺文は現に中學校の教科書中にも編纂せられて廣く人口に膾炙し、後人をして其の才識並びに人物の尋常ならざるを想はしめる。而して先生は元、村瀬誨輔と稱し、名古屋在の出生であつて、長じて泰鼎氏の門に入り、後江戸に遊び、前記の田邊次郎太夫翁に養はれて田邊姓に改めたのである。それゆゑ、村瀬なる舊姓を以つて上梓されてある書籍も尠くはない。江戸に出で、後先生の名は當時の儒林に知られ、頼山陽もまたその交友の一人で、彼が日本外史の稿を起すや、先生に種

々の材料調査を依頼し、當時の手翰二卷は今に博士の家に珍襲せられて居る。山陽の尺牘として天下一品の定評あるもの即ち之である。

三、博士の父及び親屬

石菴先生
の面目

石菴先生は、斯くの如く一生を通じて文學に親しみ深かりしと謂へども、其の行藏を按ずるに決して尋常儒林の選でない。我が邊境頓に急を傳へ鎖國の迷夢破れむとして、當代の人心轉た恟々たるものあるを看破するや、果然嗣息孫次郎氏即ち博士の父君をして文を棄て、武に就かしめた。當時に於いて憂國の士が志すべき武技は、即ち砲術に外ならない。劍は即ち一人の敵。いかに秀でたりとも國防の大任を果すに足らぬ。砲術こそは攻守ともに邦家風雲の急に應じて、最も役立つところの武技ではないか。孫次郎氏は父たる石菴先生の意を體して、萬障を排して、當時斯道の第一人者、高島秋帆の門に學んだ。

博士の父
孫次郎氏
砲術を學
ぶ

高島秋帆は長崎の出、父四郎兵衛の後を繼いで長崎取締役となるや、聰慧の資、自ら海外の物情に通じ、我が國の幼稚なる火技が到底彼の地の進歩せる砲術に敵すべからざるを知つて、愈これを輸入研讀して、國防の大策を講ずるの喫緊事たるを認

西洋火術
の師秋帆
の追書せら
る

め、刻苦精勵、蘭人に就いて所謂西洋火術を究め、其の結果、天保十二年には幕府の命を受けて大砲四挺、小砲五十挺を携へて江戸に出で、畢生の妙技を揮つて幕臣に實射の光景を見せしめ、鎖國の迷夢を打破し、當時の戰術に根本的革命を促がした傑物である。従つて頑迷固陋なる守舊派の憎惡嫉視を招くこと甚しく、彼が一世に頭角を抽んずれば、抽んずるだけ、其の身邊は危険となり、何時敵手より迫害を蒙るやも測られなかつた。火繩筒流の火技のみを怡も我が國特有の祕法なるが如く誤認し、西洋渡來のものとし云へば、宛ら國粹を毀くるものかのやうに思つて居た幕末に於いて殊に斯くの如き排外的感情を利用して己が地位の安固を策らむことに汲々たる幕臣尠なからざりし當年に於いては、彼の位地の危殆なる謂はゞ當然の成行である。孫次郎氏敢然として秋帆に師事せるは、斯様な際でありしを見れば、氏の志の存するところ、斷じて尋常武人の比でなかつたことを、識らるゝでないが。

孫次郎氏
の堅志

氏は秋帆の門に入つてより、幾多の艱苦を師とともに凌ぎ、毫も操守を更ゆるなく、孜孜として其の技を練つた。天保十四年、遂に秋帆が敵手に陥れられて獄に下り、彼が半生の努力により、漸くにして幕府及び諸藩に採用されむとせし西洋火術は、

こゝに恐るべき群疑の焦點となつたが、氏の斯道に對する初一念は斷乎として翻すべくもなかつた。斯くして、氏は後に擧げられて、我が國洋式陸軍の鼻祖たる幕府の講武所創立の任に當り、我が國防上多大の貢獻を爲したのであるが、惜しむべし、天假すに壽を以つてせず、氏は文久二年、當時流行して猖獗を極めた麻疹に感染し、溘然として長逝した。享年四十有二。

號勿堂の
由來

孫次郎氏は、名を忠篤、號を勿堂といふ。號は不知砲者勿談兵、談兵者勿忘砲といふに出づるのである。之によるも氏が斯道の爲に如何に忠實であり、以つて氏が治國平天下の雄心の如何に壯烈なるものありしかを想像せらるゝのである。氏をして今少しくその永眠の期を延ばさしめよ。國家多事なりし明治維新の秋に當つて、其の造詣を傾倒し、其の壯心を披瀝して、いかばかり華々しき活動を演じ、勿堂の名を長く竹帛に止め得たであらう。

博士の叔
父蓮舟翁

氏の令弟、即ち博士の叔父は蓮舟田邊太一氏である。太一氏は長兄孫次郎氏と其の資性を異にし、憂國慨世の志は相齊しきも、世に立つて邦家の爲に盡すに當つてや、其の選ぶところの道は攻城野戰の術にあらずして、寧ろ樽俎折衝の間にこれを求めた。即ち彼は夙に身を外交に委ね、幕末使節の一員として佛國に航し、其の材

博士の材
幹を育成
せる因由

幹を識られ、王政維新後、新政府に仕へて外務省に勤め、明治四年岩倉大使一行に參して歐米に航し、後又大久保大使に隨うて清國に赴き、所謂琉球事件の解決に盡瘁し、晩年には元老院議官に任じ錦鷄間祇候に擧げられて、悠悠天命を樂しみ清貧に甘んじ、遂に大正四年九月八十五の高齡を以つて簀を易へた。氏はまた文事に達し、必ずしも彫琢を経ずして高雅の風懷は自ら品位高き詞藻に發し、在世中、蓮舟の號によつて、其の詩、其の文、我が詩壇に一異彩を放つたものである。

石齋田邊朔郎博士は、この祖父を祖父とし、この父を父とし、將た又この叔父を叔父として、文久元年十一月朔日を以つて出生した。觀來れば博士の六十年史を一貫し、憂國の熱血と、不屈不撓の堅志と、加之、超脫高雅の風韻の、相錯綜して人の胸臆をうち來る所以のもの、蓋し偶然にあらずでないか。

以上、田邊氏の家系、及び血族の由來を明かにした編者は、これより愈々博士が幼時並びに少年期の事績を傳へねばならぬ。不知、博士は幕府倒壞、王政復古以後に於ける波瀾重疊たる時代に於いて、如何にして武家の出にして科學者たらむとするの志を立つるに到りしぞ。